

ラウンドテーブル

「多様化する思春期教育、その実践と工夫」

日時：第1日目 平成29年8月26日（土） 15：20～16：20

会場：第3会場「天樹」

座長：平岡 友良（青森保健生活協同組合あおもり協立病院）

杉村 由香理（一般社団法人 日本家族計画協会 家族計画研究センター）

テーマ	話題提供者	ファシリテーター
1) 性教育教材の工夫	杉村 由香理	黒瀬 久美子
2) 知的障がい者の性教育	黒瀬 清隆	平岡 友良
3) 月経教育	茅島 江子	東 園子
4) 小学生までの性教育	池田 真弓	富岡 由美
5) 発達障がい者への支援 ～入院中の支援体制について～	上田 智之	濱寄 真由美
6) 自虐・加虐予防・セルフマネージメント	渡曾 睦子	永井 健太

ラウンドテーブル「多様化する思春期教育～その実践と工夫」

1. 性教育教材の工夫

ファシリテーター 黒瀬 久美子（ハートブレイク）

話題提供者 杉村 由香理（一般社団法人日本家族計画協会 家族計画研究センター）

性教育の場で、種々教材は、対象者の理解を深めるためのツールとして補助的に使用されます。外国の研究機関のデータでは学習方法と記憶に残る割合は「講義を聞く」→「資料を読む」→「映像を見る」→「実技指導を受ける」→「ディスカッションする」→「実践する」→「他の人に教える」の順に高くなると言われています。

何をどのように教材として使用するかは対象者や講師の立場などで変わります。小中学生と高校生、大学生、社会人など学習や経験のレベルでも異なります。外部講師として出向くときと、授業の一環として行うときとでは、“制約”に違いがあります。更には会場設備の限界により日頃使いなれたパワーポイントが使用できない場合もあります。市販されているパンフレットを教材にすることも選択肢の一つですが、何を選ぶかは注意が必要です。

今回はラウンドテーブルディスカッションの特性を活かし、「こうあるべき」と結論づけることよりも参加者にも事例や失敗談、悩み事をお話いただきながら、それぞれに新しい発見、あるいは反省点などを見つけていただければ幸いです。

SNS などによるスピードの速い情報に追い越されないよう、私たちも指導の内容や手法を常に検証していかなくてはならない時代なのだと思います。

参加者全員に共通したゴールは「伝わる」性教育教材の在り方について語り合うこととして、時間の許す限り議論いたしましょう。

2. 知的障がい者の性教育

ファシリテーター 平岡 友良（あおもり協立病院）

話題提供者 黒瀬 清隆（ハートブレイク思春期研究所）

一般的な性教育では生命誕生・第二性徴・男女交際・性感染症などをテーマとし、命の大切さ・望まない妊娠や性感染症から自分を守ることを伝えますが、これをそのまま支援学校等で実施することは難しいものです。

ハートブレイクの 20 年間にわたる知的障がい者との関わりから、彼らに対する性教育には二つのアプローチを加える必要があると考えます。一つは、当事者が夢を抱きつつ、性行動も含めより快適に生活できるようにするための実践的な支援。これは就労意欲の向上にもつながり彼らの自立(自律)支援の柱にもなりえます。いま一つは支援者が抱えている「当事者の性行動に関する悩み」の解消につながる支援者に対するアプローチです。

今回は本人向け講座で実施した中から「性教育の工夫」「恋愛講座」「◎(マル)の授業」などを紹介します。また、問題行動とされる「性器いじり」「自慰行為」「距離感」などを禁止・抑圧を避けた解決事例の紹介もします。

3. 月経教育

ファシリテーター 東 園子 (東邦大学 看護学部)
話題提供者 茅島 江子 (秀明大学 看護学部)

月経に関する教育は、初経準備教育として初経が始まる頃に小学校の養護教諭が行うことが多い。その後は、保健の授業で学んだり、修学旅行の前などに必要時指導されているが、継続的には行われていない。その一方、近年、月経用品を販売する企業が、月経教育に関する資料を作成して学校に提供したり、インターネットで資料や動画を配信するなど、月経用品の販売戦略の一環として月経教育に参画するようになってきている。このように、月経に関しては、インターネットで様々な情報が流されているが、初経準備教育に関する情報が多い。このような中、私が所属している月経研究会では、昨年 12 月に月経に関してエビデンスのある情報を提供する目的でインターネットサイトを開設した。この新しい取り組みをご紹介します、女性達が思春期から更年期まで約 40 年間付き合う月経と快適に付き合うために、思春期から長期的な視点で、どのような月経教育が必要なのか、皆様とご一緒に考えていきたい。

4. 小学生までの性教育

ファシリテーター 富岡 由美 (帝京科学大学)
話題提供者 池田 真弓 (帝京平成大学 ヒューマンケア学部)

性教育を始める時期はいつが適切なのでしょうか？

学校における性教育は学習指導要領に則るよう位置付けられていますが、家庭ではどうでしょうか？

日々の生活の中では、性教育のできる機会が日常的にあります。特に幼児期はきょうだいの誕生や、男女のからだの違いに興味を持ち、素直な質問も多い時期です。子どもからの性に関する質問にどぎまぎした経験のある親も多い事でしょう。性を語る時、私たちは自分のセクシャリティに向き合うことになります。自分が受けた性教育やこれまでの体験・育った環境などが影響し形成されてきた価値観は、人それぞれ違います。夫婦間のパートナーシップにも左右するかもしれません。家庭での性教育は、親子関係や子どもとのコミュニケーションが大切な要因だと考えています。

情報の入り方など自分たちが子どもだった頃とはあまりにも違う環境の中で、正確な知識や対応の仕方など、親への教育も必要です。

今回のラウンドテーブルでは、参加者の皆様の実践もシェアさせていただきながら、主に幼児期からの家庭での性教育についてディスカッションし、ご示唆をいただきたいと思っております。

5. 発達障がい者への支援 ～入院中の支援体制について～

ファシリテーター 濱崎 真由美（宮崎県立看護大学）
話題提供者 上田 智之（宮崎県立看護大学）

医療機関を受診した発達障がい者数は平成 14 年の 35,000 人から平成 26 年には 195,000 人と増加しており、発達障がい者の支援に関する整備は急務であるが、専門家を中心とした取り組みが不十分な現状にある。特に思春期における発達障がい者は、幼少期とは異なり家庭内暴力をはじめとする反社会的行動などの二次的障害による入院患者も少なくない。

思春期の発達障がい者への支援には家族に対する支援が必要不可欠である。さらに、医療機関では発達障がい者に対応できる医療職の確保と関わりは必要とされ、その職種に応じた職種間の連携も重要である。

今回、フラストレーションのコントロールができない当事者に対して 10 年間に 26 回の入退院でスケジュール表の作成による視覚的構造化や約束事の媒体の作成による物理的構造化などの支援を実施したが、家族関係から構造化を維持するのが困難であった事例を紹介する。

本事例を通して、当事者・家族支援、チーム医療の視点から、思春期における発達障がい者の支援体制について、皆さまと一緒に考えていきたい。

6. 自虐・加虐予防・セルフマネジメント

ファシリテーター 永井 健太（東都医療大学 ヒューマンケア学部）
話題提供者 渡曾 睦子（東京医療保健大学 医療保健学部）

本セッションでは思春期の子どもたちの心に絡む自殺等の自虐・いじめ等の加虐の予防について話し合います。

思春期の心に絡む自虐・加虐問題は、単なる事象ではなく、家庭・成育歴等が影響している場合も多く、性問題が深く絡み合う場合も多々あります。以前、Population approach として性教育に取り組んだ際、性問題予防効果が上がらず、問題として浮上した high-risk 集団は、親から得ることのできない愛情を性関係に求める等、自己肯定感の低さが性問題とつながった子どもたちでもありました。

思春期の自虐・加虐問題予防のためには、本人が心と体の変化について知り、自分を客観的にとらえ、セルフマネジメントしていく方法も重要になります。特に虐待が背景にある場合には、早期からの家族調整や心理発達の支援等、愛情を持って関わる周囲の大人のフォローが重要となります。

現代の子どもの思春期の心とこれからの命を守るためのセッションになります。よろしくお願いいたします。